

100年 先を読む

37

情報の コロンブス交換を 逆手に利用する

▶ 善悪相半ばするコロンブス交換

昨年、アメリカで一気に爆発したBLM（黒人差別撤廃運動）の影響で、かつては偉人とされていた人物の銅像がアメリカやイギリスの各地で倒壊される騒動が発生した。それらのうち意外という印象があったのがコロンブスの銅像への攻撃である。コロンブスはヨーロッパ大陸からアメリカ大陸に最初に到達したとされる偉業により英雄とされてきたが、アメリカ大陸の先住民への蛮行が周知されるようになり、評価が反転した結果である。

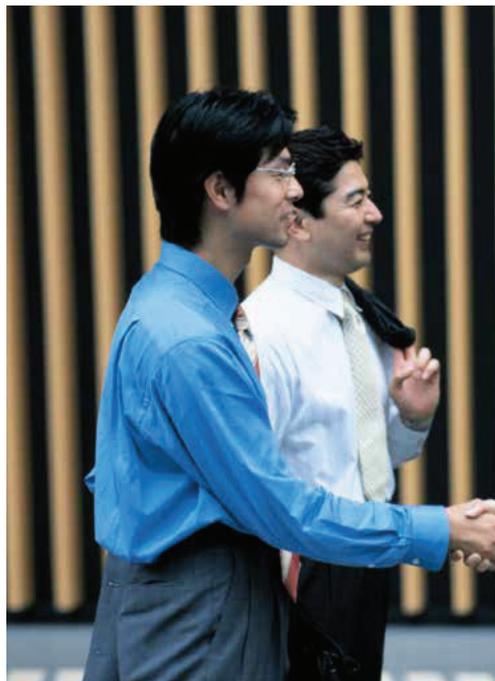
コロンブスは多数の先住民を虐殺しただけでなく、探検の資金を負担したスペインのイザベル女王から先住民を奴隷にすることを許可されていた奴隷商人でもあり、それがBLM運動の渦中で非難されたことになる。金銀と奴隷以外にコロンブスがアメリカから輸送してきたものはテンジクネズミ、シチメンチョウなどの動物やタバコ、トマト、アボカド、パパイア、ジャガイモ、ラッカセイなどの植物があり、とりわけジャガイモはヨーロッパの飢饉を救済した。

アメリカ大陸に持参したのもあり、ウマ、ウシ、ヒツジ、ウサギなどの動物やレタス、コムギ、ダイズ、コショウ、タマネギ、キャベツ、サトウキビ、カラスムギなどの植物が代表である。この奪取と提供を一体としてコロンブス交換というのが、最悪の交換が疫病であった。コロンブスの一行はアメリカ大陸へコレラ、ペスト、チフス、天然痘などを伝播させる一方、ヨーロッパ大陸へは先住民と肉体交渉をもった船員が梅毒と黄熱を

運搬してきた。

▶ 現代にも継続する コロンブス交換

中米で繁栄していたアステカ王国はスペインのH・コルテスが1521年に滅亡させたとされるが、住民に免疫のない天然痘とチフスで人口が激減したことも原因である。反対に梅毒も威力を發揮し、コロンブス艦隊の帰国から数年で、ヨーロッパで数百万人が死亡したとされ、さらにインド航



路を經由して東南アジアに伝播し、20年後の1512年には日本にまで到達している。長々と歴史を紹介してきたのは、このコロンブス交換は現代にも継承されているからである。

真偽は不明であるが、新型コロナウイルスは食料とする動物を捕獲するために中国の奥地に侵入した人間が媒介したという見解がある。エイズウイルスもエボラウイルスもアフリカの奥地に食料を調達するために侵入した現地の人々が感染した結果とされている。食料と疫病の交換と表現すれば、コロンブス交換の一種である。気温上昇によりシベリアの凍土地帯の表面が融解し、凍結されていた未知のウイルスが登場しているというコロンブス交換もある。

▶ 情報社会のコロンブス交換に 勝利する方法

現在の情報社会でもコロンブス交換は発生している。インターネットは人類が発明した通信手段では最速で普及した技術であり、20年で世界の20%の人々が利用するようになり、登場から30年が経過した現在では60%の人々に浸透している。こ

の恩恵により、個人や企業の相互の情報交換だけではなく、巨大なサーバーから必要な情報を簡単に引用することも、膨大なアーカイブから過去の映像を検索することも、希望する商品を一瞬で注文することも可能になっている。

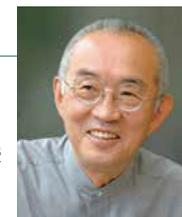
これは便利であることには間違いないが、その利便と交換で個人の検索行動や注文行動は少数の巨大企業に把握されている。かつてグーグルの会長であったE・シュミットは「われわれは現在、あなたが想像していることはほぼ察知している」と発言している。グーグルに世界から1日に100億近くアクセスしてくる検索内容を自動分析すれば、上記の言葉は虚言ではなく真実である。この情報のコロンブス交換にはサイバーウイルスという厄介な疫病も添付されている。

かつてのスペイン王国をはるかに凌駕するGAF^{*}A帝国が収集する情報はネットワークを經由したデジタル情報であるが、中小企業が電話や口頭で顧客と交換する情報は雑音の混入したアナログ情報である。古代ローマ帝国の賢帝マルクス・アウレリウスには「いかなるものの本質も価値も表面にはない」という名言がある。GAF^{*}A帝国が収集する無味乾燥な情報ではなく、中小企業が毎日のように交換する雑音のある情報こそ、情報社会で発展する重要な資源である。

^{*} グーグル、アマゾン、フェイスブック、アップルの総称

東京大学名誉教授

つきおよしお
月尾嘉男
Tsukio Yoshio



昭和17(1942)年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。コンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策等を研究。全国各地でカヌーとクロスカントリースキーをしながら私塾を主宰し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。著書に「幸福実感社会への転進」(モラロジー研究所)、「転換日本」(東京大学出版会)ほか多数。